

現在2022年の1月下旬であるが、いまだ新型コロナの影響まった
だ中にあるとは、1年前には考えもしなかった事態である。という
より各地で感染者数が過去最多を更新中である。

結局、大学院はガイダンスと最初の授業が対面ただただで、ほ
ぼ1年間オンラインで行われ、留学生にいたっては日本に入国する
ことすらかなわない。様々な活動が制約を受け、我慢や自粛が長期
化しているのに事態が好転しないのだから、全くやりきれない。

しかし、学問・研究活動は停滞してはいない。その証拠として胸
を張って『境界を越えて』第22号をお届けする。今号にて、巻頭座
談会や外部から寄稿者をお迎えするなどの新機軸を打ち出せたこと
は実に喜ばしいことである。といってもこれは私の功績ではなく、
今年度紀要編集委員である渡名喜庸哲氏のご尽力の賜物である。こ
の場を借りて感謝の意を表したい。

新しい試みである巻頭座談会は、「哲学対話とは何か」という深淵
でありつつポピュラーな関心事ともなりうるテーマで開催された。
顔ぶれは、立教大学文学部学部長・大学院文学研究科長である河野
哲也氏をはじめとする気鋭の哲学研究者であり、大変読みごたえの
ある座談会となった。これも渡名喜氏の采配によるものである。

また、渡名喜氏は、2年連続でZoomによるオンライン開催とな
った研究交流会の運営に貢献したばかりでなく、今年も論文を寄稿
してくれた。役職と授業運営を自転車操業でこなしている身として
は、実に頭が下がることである。また、交流会に関しては、学会事
務局として告知や出欠管理など様々な実務を担当してくれた高沼利
樹氏にもお礼申し上げる。

さて、研究交流会では、修士2年の篠山昂平氏と伊藤順之介氏の
両名が修士論文構想の一部について報告をした。そのコメントータ
ーは、本学文学部文学科日本文学専修教授の石川巧氏と東京藝術大
学教授の毛利嘉孝氏に引き受けていただいた。両名の、実心的確で
知的刺激に満ちたご指摘の数々を聞いたのは、報告者本人のみなら

ず、参加者全員にとって得がたい体験となった。もちろん報告者にとっては耳の痛い指摘もあっただろうが、修士論文の完成度を上げるための貴重な機会であったと思う。ちなみに、これらのご批判・ご指摘を糧として、両名とも無事に修士論文を提出することができた。

研究交流会のオンライン開催は、遠隔地の人や学部学生にとって参加のハードルが下がるというメリットもあり、我々にもオンライン開催のノウハウが蓄積されつつあるように思う。もっとも、従来交流会後に学内食堂で開催されてきた懇親会がないというのは、いささか寂しいものではある。ワイン片手にざっくばらんに語り合う機会が来年は与えられることを切に願う。

年によっては、掲載原稿が不足気味で困ることもあるが、今号では博士課程在籍中の北野亮太郎氏が論文を、高沼利樹氏が研究ノートを投稿してくれたおかげで、質・量ともに充実することができた。

最近の試みである院生による書評も定着してきた。現在は必修科目である春学期の全体授業の課題として書評執筆が課されているので、これを夏休み中にブラッシュアップして紀要に投稿することを推奨している。短い文章であっても活字にするという行為は、文章表現や論理構成力の向上につながり、自身の論文を書くためにも大いに役立つはずである。今号では修士1年の佐藤瑛祐氏、宮原義康氏、博士1年の趙雯喬氏の3名の書評が掲載された。加えて、立教大学・大学院の出身でも教員でもない、純粋に外部の教員である森祐亮氏、河本英夫氏の書評を掲載することができた。紀要の多様性という点でも喜ばしいことだが、もっと喜ばしいことがある。両氏が書評の対象とした著書が、いずれも本大学院修了生の著作である点である。彼らの業績を丁寧に紹介する労をとってくださった森氏、河本氏には深く感謝する。本号を手にとられた皆さまへ、今後も開かれた学会、紀要を目指すので、比較文明学専攻並びに立教比較文明学会の活動を、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

2022年1月

立教比較文明学会会長

立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻主任

菅野聡美